



ひだまりの会の生みの親の一人、泉原さん(右)。カウンセラーとして月例会の進行も務める

告されました。そのわずか3日後に、夫は亡くなりました。

泉原さんは、死別体験で受けた心の傷は、医療関係者によるものが大きかったと言います。

まず医師から初めて告知を受けた時のこと。医師は専門用語を多用しながら病状を説明しましたが、ショックで混乱した彼女には、聞き慣れない専門用語が頭に入りませんでした。

次は、夫が胃がんの手術を受けた後、執刀した外科医から泉原さんに何の説明もなく、摘出した夫の臓器を見せられたことです。医師にすれば手術が成功した証を示したということかもしれません。が、意思確認もなく夫の臓器が無造作に扱われたことに強いショックを受けました。

そして再入院後。一度、自宅に戻った直後に夫の容態が悪化したとの連絡が入り、急いで病院へ駆け戻ると集中治療室で意識不明の状態でした。少しすると夫の意識が戻ったため、泉原さんは無我夢中でしゃべりかけたそうです。ところがその時、医師から言われたのは「出て行ってくれ」という一言でした。それから間もなく、夫は静かに息を引き取りました。夫の死後、泉原さんは「自分の中の時計が止まった」と感じまし

た。眠れない日が続き、睡眠薬を飲むようになり、次第に家にひきこもるようになっていきました。しばらくは、医療関係者から受けた心の傷から病院を憎む気持ちも強かったのです。

しかし、時間が経つにつれ、それ以上に「大切な人を亡くした苦しさを誰にも分かってくれなない」ことにもどかしさを感じるようになったと言います。

「伴侶を亡くしたこの悲しみや痛みを分かってくれる所はないのだろうか」。泉原さんは、役所、

公的な電話相談窓口、弁護士を訪ねましたが、見つかりません。

四十九日を終え、落ち込んでいた彼女にほんの少し光が見えたと感じる小さな出来事がありました。

4月のある日、家の庭にサザンカの白い花が咲いていることに気付いたのです。サザンカは夫と一緒に植えた花です。そのサザンカが春風にそよぎ、きらきらと光って見えました。

泉原さんは夫との死別後、初めて季節を感じました。自分の中の「時計」はまだ動いていませんでしたが、「季節」は心の中で移ろい始めたのです。

泉原さんが今でも「自分でも不思議な心の動きだった」と思うのは、この時「この悲嘆を分かってくれるのは葬儀社しかない」と思

いつめたことでした。そして百か日を過ぎた頃、泉原さんは自ら応募して公益社に就職します。

本人は「すごい勘違い人生ですよ」と笑いますが、そうとも言えないのはその後の「ひだまりの会」での彼女の活動ぶりが物語っています。

公益社で葬儀会館の事務職として働き始めた泉原さんは、夫を亡くした30代の女性の葬儀に巡り合います。自分の死別体験と全く同じでした。その瞬間、泉原さんは自分のやろうと思っていたこと、やるべきことを直感しました。「あれから私の時間が動き出しました」と泉原さんは言います。

それからの泉原さんは、より積極的に仕事に取り組みました。一消費者の目線で、会社にいろいろな提案をします。例えば、葬儀会館で生け花教室を開く企画。地域に呼びかけると、主に集まったのは遺族でした。

こうした遺族の生きがいにつながるような実践が、後に「ひだまりの会」の分科会活動など遺族のライフサポート活動に活かされるのです。

そんなある日、自身の働く葬儀会館で2つの棺が並ぶ葬儀が行われました。ある男性が死亡し、その死にショックを受けた妻が後を追って亡くなったといえます。泉原さんはその時、遺族の悲しみを癒すグリーンケアの必要性を強く感じたのです。公益社に「遺族の悲嘆の気持ち」に寄り添うためのプロジェクトを提案しました。こうして2003年12月、「ひだまりの会」が発足したのです。(燦ホールディングス・公益社代表取締役社長 古内耕太郎)

遺族の心に寄り添う

— ひだまりの会の軌跡 —

第2回

行き場のない悲嘆を葬儀社に向け